

高等学校

平成24年度

教育研究員研究報告書

地理歴史

東京都教育委員会

# 目 次

I 研究主題設定の理由	1
II 研究の視点	1
III 研究の仮説	2
IV 研究の方法	2
V 研究の内容	3
VI 研究の成果	24
VII 今後の課題	24

## 研究主題

# 「時間軸と空間軸の二つの視点を重視した学習活動における評価の工夫～教科書「江戸から東京へ」を活用して～」

## I 研究主題設定の理由

学習指導要領の改訂により、思考力・判断力・表現力の育成が一層重視され、平成22年文部科学省の「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」では、「観点別学習状況の評価を実施し、きめの細かい学習指導と生徒一人一人の学習の確実な定着を図っていく必要がある」と示されている。

しかし、昨年度の教育研究員報告書では、レディネステストの結果から「諸資料を活用し、多面的に考える力、自分の考えを表現する力などが不足している」と報告しており、平成21年文部科学省の「学習指導と学習評価に対する意識調査」では、「高等学校の教員の意識が小・中学校の教員と比べると、『知識・理解』の観点に傾きがちである」と示されている。これらから、高等学校地理歴史科においては、思考力・判断力・表現力の育成が十分に行われておらず、「思考・判断・表現」の観点に関する学習評価の検討も十分に行われていない現状にあると言える。

この現状について本部会では課題意識をもち、思考力・判断力・表現力を育成するためには、多面的・多角的に考察させ表現させる学習場面や学習材を設定して授業開発を行うことと、「思考・判断・表現」を中心とした観点別評価の評価規準や評価方法などを工夫して授業改善を図ることの2点が有効であると考えた。加えて、昨年度の教育研究員報告書に、「時間軸と空間軸から社会的事象を捉えさせることで生徒の多面的・多角的考察を促すことができる」と報告されており、この点を更に深める必要があると判断した。また、都独自の日本史科目「江戸から東京へ」は、身近な史跡や文化財を活用して地理的視点も踏まえて学習させることをねらいとしており、時間軸と空間軸の二つの視点から身近な史跡や文化財を切り口に考察させることについて、本部会と共通の課題意識があると判断した。

以上から、本部会では教科書「江戸から東京へ」の活用を図りつつ、時間軸と空間軸の二つの視点を重視した学習活動とその評価の工夫を主題として、実践研究を進めることとした。

## II 研究の視点

研究主題にある「時間軸と空間軸の二つの視点を重視した学習活動」とは、社会的事象について諸資料に基づき、歴史的視点や地理的視点を重視して多面的・多角的な考察を行い、その過程や結果を適切に表現する活動であり、それらの活動の「評価の工夫」とは、観点別評価を用いて、ワークシートやペーパーテスト等から思考力・判断力・表現力の育成につながるように工夫することである。

本部会においては「時間軸・空間軸の二つの視点」を柱とし、多面的・多角的に社会的事象について諸資料を根拠に考察させ、表現させるため、学習目標に基づき生徒の思考を促す諸資料や教師の発問等を用意するとともに、生徒が思考・判断・表現する学習場面や学習機会を設定することとした。諸資料については、歴史的視点や地理的視点として地図や年表・絵画・風刺画などを活用したり、「江戸から東京へ」を用いて身近な視点から多面的・多角的

に考察させたりする工夫を行うこととした。

また、設定した目標について、生徒の学習状況を「十分満足できる」状況（A）、「おおむね満足できる」状況（B）、「努力を要する」状況（C）と判断する観点別評価規準を設定し、ペーパーテストだけでなく、授業中のワークシートやノート、生徒の発言内容の観察など多様な方法で生徒の学習状況を評価して、その評価に基づいて指導の改善を図る。そのためには、多面的・多角的に考察させる諸資料を活用したワークシートやペーパーテスト等を用意し、生徒の思考の過程をスモールステップにしたり可視化したりする工夫を行う。

### Ⅲ 研究の仮説

以下の3点の仮説を立てて授業と評価の工夫を行い、検証した。

- 1 時間軸と空間軸の二つの視点を重視した学習活動を工夫することで、多面的・多角的考察を促し、生徒の思考力・判断力・表現力を育成することができる。
- 2 多面的・多角的考察に着目した「思考・判断・表現」の評価規準を作成し、最適な評価場面を設定することで、思考力・判断力・表現力を適切に評価することができる。
- 3 思考力・判断力・表現力を育成するための学習活動を評価し、生徒の学習状況を把握することで、指導の改善点を明確にすることができ、指導と評価の一体化に結び付けることができる。

### Ⅳ 研究の方法

#### 1 具体的方策

以下の3点を取り入れた授業と評価を行い、その後、成果と課題をまとめた。

- (1) 時間軸と空間軸の双方に関連する課題を設定し、歴史的アプローチと地理的アプローチを明確にしながら、授業を構成する。
- (2) 思考力・判断力・表現力の観点を重視した評価規準を作成し、単元の中で思考力・判断力・表現力を育成するための評価場面を適切に設定し、評価を行う。
- (3) 思考力・判断力・表現力を育成するために用いたワークシートやペーパーテストなどから生徒の学習状況を把握し、指導の改善につなげる。

#### 2 各科目における指導案の作成及び検証授業・評価

四つの実践事例では、具体的方策で述べた3点を踏まえて指導案を作成し、検証授業を行った。その上で、ワークシートやペーパーテストなどにより評価・分析を行い、次の3点を中心に成果と課題をまとめた。

- (1) 時間軸と空間軸を意識した課題によって、生徒の思考力・判断力・表現力を育成することができたか。
- (2) 適切な評価規準と評価場面の設定により、生徒の思考力・判断力・表現力を育成することができたか。
- (3) 生徒の思考力・判断力・表現力を育成する上で、ワークシートやペーパーテストが十分に工夫されていたか。また、指導の改善を図ることができたか。

## V 研究の内容

### 1 研究構想

全体テーマ **新学習指導要領に対応した授業の在り方について**

高校部会テーマ **思考力・判断力・表現力を育成するための評価の工夫**

#### 教科等における思考力・判断力・表現力とは

【思考力】社会的事象について、諸資料を活用して多面的・多角的に考えたり、様々な事象を関連付けて考えたりする力

【判断力】社会的事象について、諸資料を根拠にして、自らの考えをまとめたり決めたりする力

【表現力】自らの考えを、諸資料を活用して、適切に伝えたり論述したりする力

#### 現状と課題

【現 状】知識・理解を重視した学習と評価に重点が置かれ、思考力・判断力・表現力を育成する学習と評価方法が十分に検討されていない。

【課 題】時間軸と空間軸の二つの視点を重視した学習活動を通して、地理歴史科の思考力・判断力・表現力を育むとともに、こうした力を評価するための評価規準と具体的な評価場面を工夫していくことが課題である。

#### 地理歴史 部会主題

時間軸と空間軸の二つの視点を重視した学習活動における評価の工夫  
～教科書「江戸から東京へ」を活用して～

#### 仮 説

- ・時間軸と空間軸の二つの視点を重視した学習活動を工夫することで、多面的・多角的考察を促し、生徒の思考力・判断力・表現力を育成することができる。
- ・多面的・多角的考察に着目した「思考・判断・表現」の評価規準を作成し、最適な評価場面を設定することで、思考力・判断力・表現力を適切に評価することができる。
- ・思考力・判断力・表現力を育成するための学習活動を評価し、生徒の学習状況を把握することで、指導の改善点を明確にすることができ、指導と評価の一体化に結び付けることができる。

#### 具体的方策

- ・時間軸と空間軸の双方に関連する課題を設定し、歴史的アプローチと地理的アプローチを明確にしながら、授業を構成する。
- ・思考力・判断力・表現力の観点を重視した評価規準を作成し、単元の中で思考力・判断力・表現力を育成するための評価場面を適切に設定し、評価を行う。
- ・思考力・判断力・表現力を育成するために用いたワークシートやペーパーテストなどから生徒の学習状況を把握し、指導の改善につなげる。

#### 検証・評価

- ・社会的事象について、時間軸と空間軸の二つの視点から捉えた課題によって、生徒の思考力・判断力・表現力が育成されたかを、ワークシートやペーパーテストなどから検証する。
- ・ワークシートやペーパーテストなどを分析し、評価規準や評価場面の設定が、生徒の思考力・判断力・表現力を育成する上で適切であるかを検証する。
- ・ワークシートやペーパーテストなどが、生徒の思考力・判断力・表現力を育成する上で十分に工夫されたものになっているか、ワークシートやペーパーテストなどの結果を分析して検証する。また、それに基づいて指導の改善を図ることができたか確認する。

## 2 実践事例 I

科目名	江戸から東京へ	学年	第2学年
-----	---------	----	------

### (1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

ア 単元名 8 開国

イ 使用教材 『江戸から東京へ』（東京都教育委員会）

ICT学習コンテンツ（図表・画像・地図等） 兼 ワークシート

「桜田門外の変」の映画等の視聴覚教材

### (2) 単元（題材）の指導目標

ア 江戸幕府が開国した理由及び開国と幕府の権威衰退との因果関係について、当時の国際情勢や国内の政治的対立等と関連付けて考察させる。

イ ペリー来航と開国、不平等条約調印や開港後の貿易が幕末の政治・経済・社会に与えた影響について、江戸近辺の史跡や資料等を根拠に考察させる。

### (3) 単元（題材）の評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 資料活用 of 技能	エ 知識・理解
①幕府が開国に至る背景と、その経緯や影響について関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。 ②開国前後の政治や社会の動向に対して、関心と課題意識を高めている。	①幕府が開国を決断した理由について、当時の国際情勢と関連付けて多面的・多角的に考察し、自分の考えを適切に表現している。 ②開国と幕府権威の衰退との因果関係について、当時の国内の政治的対立等を踏まえながら、多面的・多角的に考察し、自分の考えを適切に表現している。	①統計や地図・文字資料・絵画・写真等から幕末の国際状況や国内の風潮、開港貿易の特徴等について有用な情報を読み取っている。	①ペリー来航から開国、桜田門外の変に至る歴史の流れを理解し、必要な知識を身に付けている。また、開国と現代社会とのつながりを理解している。

### (4) 単元（題材）の指導と評価の計画（3時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点				評価規準 (評価方法など)
		関	思	技	知	
第一次(本時)	【ねらい】「幕府はなぜ開国を決断したのか？」というテーマについて、当時の国際情勢と関連付けて多面的・多角的に考察させ、自分の考えを表現させる。					
	・お台場の現在の写真と幕末の絵を見て台場築造の意図を推察し、歴史的背景に関心と課題意識を高める。 ・19世紀前半の国際情勢を踏まえ、ペリー来航の経緯と目的を理解しながら、幕府（老中阿部正弘）の対応及びその結果について考え、開国の判断に関する自分の見解を表現する。	●	●			①幕府が開国に至る背景と、その経緯や影響について関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。(観察、ワークシートの記述) ①幕府が開国を決断した理由について、当時の国際情勢と関連付けて多面的・多角的に考察し、自分の考えを適切に表現している。(観察、発表、ワークシートの記述)

第二次	<p>【ねらい】「桜田門外の変は、なぜ起きたのか？」というテーマについて、開国と幕府権威の衰退との因果関係や当時の国内の政治的対立等を踏まえながら、多面的・多角的に考察させ、自分の考えを表現させる。</p>			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>尊王攘夷派と開国派、一橋派と南紀派などの国内対立の構図に着目しながら、ペリー来航・開国から桜田門外の変に至る因果関係を理解する。</li> <li>大老井伊直弼の立場と思想・行動について理解し、桜田門外の変の要因や歴史的意義について考察する。</li> </ul>	●	●	<ul style="list-style-type: none"> <li>①ペリー来航から開国、桜田門外の変に至る歴史の流れを理解し、必要な知識を身に付けている。(ワークシートの記述、ペーパーテスト)</li> <li>②開国と幕府権威の衰退との因果関係について、当時の国内の政治的対立等を踏まえながら、多面的・多角的に考察し、自分の考えを適切に表現している。(観察、発表、ワークシートの記述)</li> </ul>
第三次	<p>【ねらい】「なぜ八王子に絹の道があったのか？」というテーマについて、開国（開港貿易）が幕末の政治・経済・社会に与えた影響を踏まえながら、諸資料に基づいて考えさせる。</p>			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>幕末開港貿易の特徴について、資料から主要輸出入品目、貿易港、相手国等について読み取り、貿易の開始が国内社会に与えた影響について考察する。</li> <li>教科書の学びの窓の写真から、八王子と横浜を結ぶ「絹の道」についての関心を持ち、鍵水商人が活躍した歴史的背景について追究する。</li> </ul>	●	●	<ul style="list-style-type: none"> <li>①統計や地図・文字資料・絵画・写真等から幕末の国際状況や国内の風潮、開港貿易の特徴等について有用な情報を読み取っている。(ワークシートの記述、ペーパーテスト)</li> <li>②開国前後の政治や社会の動向に対して、関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。(ワークシートの記述、発表)</li> </ul>

## (5) 本時（全3時間中の1時間目）

### ア 本時の目標

- (7) 江戸近辺の史跡や資料等を示しながら、幕府が開国の決断に至る背景と、その経緯や影響について関心と課題意識を高める。
- (4) 幕府が開国を決断した理由について、当時の国際情勢と関連付けて多面的・多角的に考察させ、表現させる。

### イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	15分	<ul style="list-style-type: none"> <li>桜田門外の変に関する映画から列強の中国進出に関する場面を視聴し、本単元のテーマに関心をもつ。</li> <li>お台場の現在と幕末の写真や絵を見て、その築造の目的を考え記述する。</li> <li>欧米列強のアジア進出の意図や状況を理解し、幕府の対応を確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本単元のテーマを示した後に視聴する。</li> <li>現在のお台場の様子にも触れ、本単元への興味・関心を高める。</li> <li>前時の復習を兼ねて、説明を加える。</li> </ul>	
展開	32分	<ul style="list-style-type: none"> <li>ペリーがアメリカを出て浦賀に来航するまでの経路を地図上でたどり、太平洋横断ではないことや沖縄・小笠原に立ち寄っていることに気付く。</li> <li>ペリー来航に対して庶民はどのような反応を見せたかを、当時描かれたペリーの肖像画や川柳などから多面的・多角的に考察し、記述・発言する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書『江戸から東京へ』44ページの地図を示し、ペリー艦隊の航路について気付いたことを発言させる。</li> </ul>	



展開	32分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・19世紀前半の国際情勢を踏まえ、ペリー来航の目的とその背景を理解する。</li> <li>・ビッドルとペリーを比較し、ペリーが軍艦の武力を背景とした強硬な姿勢（砲艦外交）をとっていたことに気づき、幕府の危機感を理解する。</li> <li>・幕府がお台場を築造した理由を確認する。</li> <li>・開国を決断した老中首座の阿部正弘について、政治的判断の過程を理解し、その問題点を考察する。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日米和親条約を読み、内容を理解する。</li> <li>・日露和親条約の領土画定に関する条文を読む。</li> <li>・「なぜ幕府は開国を決断したのか?」、「開国を拒否した場合、どのような結果が考えられるか?」という問いに対して、自分の考えをワークシートに記入し、発表する（発表を聞く）。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・視聴覚教材等を活用して、この頃のアメリカの状況を説明する。</li> <li>・ビッドルとペリーの比較表を利用し、ビッドルとペリーの相違点に気付かせる。</li> <li>・桜田門外の変の映画のペリー来航と幕府の対応に関する場面を見せる。</li> <li>・導入で考えさせたお台場の由来についてのワークシートに正解を記入させる。</li> <li>・国難に臨んだ阿部の苦悩を想像させる。</li> <li>・阿部が挙国一致策を取った（独裁を改めた）ことで、結果として幕府の権威が急速に衰えてしまったことを理解させる。</li> <li>・桜田門外の変の映画の阿部正弘ら老中と徳川斉昭との議論の場面を見せる。</li> <li>・日米和親条約の要点を説明する。</li> <li>・地図で北方領土を確認させる。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・机間指導を行い、ワークシートの記入が進まない生徒に対して、解答のヒントを示す。</li> <li>・挙手又は指名により数名の生徒を選び、記入した自分の考えを発表させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お台場が築造された背景について、関心と課題意識を高めている。（アー①）（観察・ワークシートの記述）</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幕府が開国を決断した理由について、当時の国際情勢と関連付けて多面的・多角的に考察し、自分の考えを適切に表現している。（イー①）（観察・発表・ワークシート）</li> </ul>
まとめ	3分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・19世紀前半の国際情勢と、我が国の地理的条件などを理解するとともに、ペリー来航の歴史的意義をまとめる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日米和親条約締結後の幕政や、幕末の政治・経済・社会がどのように展開していくのかについて関心を向けさせる。</li> </ul>	

## ウ 評価の実際

### 評価場面2 思考・判断・表現

19世紀前半の国際情勢を踏まえ、ペリー来航の経緯と目的を理解しながら、幕府（老中阿部正弘）の対応及びその結果について考え、開国の判断に関する自分の見解を表現する。

評価規準【思①】 幕府が開国を決断した理由について、当時の国際情勢と関連付けて多面的・多角的に考察し、自分の考えを適切に表現している。

#### 【「おおむね満足できる」状況（B）と評価される例】

- ・「なぜ幕府は開国を決断したのか?」については、欧米列強によるアジア進出という国際状況と、ペリーの強硬な外交姿勢（砲艦外交）が幕府を開国に踏み切らせたという2点が述べられており、「開国を拒否した場合、どのような結果が考えられるか?」については、幕府の権威の維持に関する見解と、欧米列強の動向に関する見解が述べられている。

#### <生徒の記述例>

- ・幕府が開国を決断したのは、欧米列強のアジア進出という国際情勢から、日本の開国は時間の問題となっている状況であり、そこにペリーが来航して強硬な姿勢で開国を迫ったためである。また、開国を拒否した場合は、幕府はそれまでの独裁体制を維持できるが、欧米列強との戦争を招き、幕府の力で対抗できず、日本が植民地になってしまうことが考えられる。

#### 【「十分満足できる」状況（A）と評価される例】



- ・「なぜ幕府は開国を決断したのか？」については、フェートン号事件やアヘン戦争等によるイギリスへの恐れとペリーの江戸湾測量や空砲発射など威圧的で戦争をも辞さない態度や黒船（蒸気船）の威圧感が、それまでの外国船やビッドル来航の際とは異なっていたことなど、既習事項を踏まえて具体的な根拠が述べられている。また、「開国を拒否した場合、どのような結果が考えられるか？」については、開国にまつわる阿部の挙国一致政策が国内の意見対立と幕府の権威失墜の端緒となったことを明らかにし、永続的な鎖国の維持が可能かどうかの見解が論理的に述べられている。併せて積極的に自分の見解を發表している。

＜生徒の記述例＞

- ・幕府が開国を決断したのは、フェートン号事件やアヘン戦争でイギリスの軍事力行使が現実味を帯びている状況の中、ペリー艦隊から欧米列強の軍事力を実感し、またペリーの姿勢がビッドルなどそれまでの来航者と異なり、戦争も辞さない砲艦外交であったことから、開国が切迫した状況であることを悟ったためである。開国を拒否した場合は、幕府は外部からの意見を認めないため、国内における尊攘派と開国派の対立は生まれず、幕府の独裁体制維持は可能となるが、台場築造など沿岸防御を固めてペリー（アメリカ）や列強との開戦を避けながら、軍備や制度の近代化を進めることが急務となり、結局いずれ幕府は弱体化したオランダ以外の列強と外交（同盟）関係を結ばざるを得なくなる。

【「努力を要する」状況（C）と評価される例と教師の指導】

生徒の状況	教師の指導
<ul style="list-style-type: none"> <li>・幕府が開国を決断した理由について、当時の国際状況やペリー来航との関連性を見いだすことができない。</li> <li>・自分の考えがまとまらず、文字に書き表すことができない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>⇒ 机間指導の中で、生徒に合わせて考えるヒントを与える。</li> <li>⇒ 生徒自身が納得する解答に至らなくても、短文でも結論をワークシートに書き込むように指導する。</li> </ul>

(6) 本時の振り返り

ア 仮説の検証

(ア) 仮説1の検証

教科書『江戸から東京へ』の地図や東京都教育委員会作成の学習コンテンツ等を使用して、ペリー来航時のアジア情勢（列強のアジア進出）について地図を活用するなどして、地理的視点と歴史的視点を踏まえて学習させることができた。生徒のワークシートの記述からは「開国を拒否した場合、どのような結果が考えられるか？」の問いに対して「アメリカと戦争になってイギリスにアヘン戦争で敗北した清のようになっていた」、「武力行使で無理に開国させられ、植民地扱いされているかもしれない」等の記述が多く見られた。時間軸と空間軸の二つの視点が、生徒にとって、幕府が開国の判断をした理由を考え表現するための手掛かりとなっている。これらから思考力・判断力・表現力を育成したと言える。

(イ) 仮説2の検証

ペリー来航に際して、江戸の庶民の視点やアメリカの立場などにも着目し、日本の幕府を中心とした観点にとらわれず、多面的・多角的なものの見方や考え方を提示できた。生徒のワークシートの記述からは「(当時の人々がペリーを描いた多くの絵やペリー来航の際の庶民の反応を紹介する動画を見た上で)なぜこのような絵が描かれたのだろうか？」の

質問に対して「新しい技術をもった黒船や西洋人の珍しさに時代の移り変わりを感じ、江戸の庶民達は興味や好奇心をもった」との内容や、「なぜ幕府は開国を決断したのか？」の質問に対して「ペリーの来航を見て、いざ戦争となった時、武力で負けてしまうと判断したから」という内容が多く見られ、ペリーの強硬な外交姿勢を客観的に分析し、論理的に表現することができている。これらから、評価規準を適切に設定し、幕府が開国を決断した理由を記述させる評価場面も適切に設定できたと言える。

(ウ) 仮説3の検証

「おおむね満足できる」状況（B）を指導上の目標として授業を行うことで、指導方針を明確化することができた。「努力を要する」状況（C）と評価される生徒に対しては、指導内容や指導方法が思考力・判断力・表現力の育成に結び付いていないことを教師が自覚でき、速やかな個別対応や指導の改善を図ることが可能となった。

イ 成果と課題

(7) 成果

I C T機材を使い、映画の1シーンや日本史学習用の短い動画、地図・年表・絵画・写真等、多様な材料を提示した。時間軸と空間軸の複眼的視点を意識させ、多面的・多角的な観点や思考に結び付けたため効果的に活用できた。生徒の93%は、提示されたそれらの資料を根拠にして、「なぜ幕府は開国を決断したのか？」というテーマについて自分の考えを表現することができた。評価場面と学習状況の評価をあらかじめ明確化しておくことにより、教師自身も本時のテーマや目標を常に意識することができ、一貫した指導方針を得ることができた。

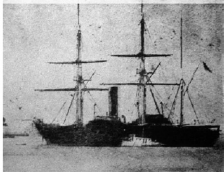
また、時間軸と空間軸の二つの視点を重視した学習活動を行い、思考力・判断力・表現力を測る設問と評価を工夫することで、知識注入型の授業に比べ、生徒の主体的な学習意欲を高めることができた。さらに、毎時評価することを通して教員が生徒の4観点の力を的確に把握し、4観点の力を伸ばす指導の改善を図ることにつながった。

また、時間軸と空間軸の二つの視点を重視した学習活動を行い、思考力・判断力・表現力を測る設問と評価を工夫することで、知識注入型の授業に比べ、生徒の主体的な学習意欲を高めることができた。さらに、毎時評価することを通して教員が生徒の4観点の力を的確に把握し、4観点の力を伸ばす指導の改善を図ることにつながった。

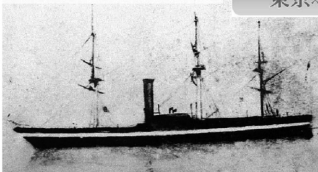
(イ) 課題

思考力・判断力・表現力を育成するためには、長期間にわたり継続的な指導と評価・検証を行い、絶えず授業の改善を図る必要がある。しかし、本単元以前の授業においては「知識・理解」の観点に重点を置き、「思考」の手掛かりを与える指導はしていても、実際に生徒自身に「判断・表現」させ、それを評価・検証する授業が十分になされていたとは言いがたい。また、「関心→意欲→知識→理解→思考→判断→表現」という指導プロセスを省略した部分があり、十分な学習効果が上がらなかったこともあった。効率的・効果的な指導を継続的に行うために、年間授業計画段階からの準備と、汎用性のある学習コンテンツを作成したり利用したりして指導を行っていくことが望ましいと考えられる。

サスケハナ号 (Wikipedia)



ポーハタン号 (Wikipedia)



江戸から  
東京へ

**「泰平の眠りを覚ます上喜撰  
たつた四杯で夜も眠れず」**

**《ペリー来航の目的…日本の開国（開港）》**  
 >アメリカが日本の開国を望んだ理由

**アメリカの視点から理由を2つ書こう**

>米の要求  
開港場の設定/食料・石炭・水の給与/通商貿易

I C T学習コンテンツ

## 2 実践事例Ⅱ

科目名	日本史 A	学年	第 3 学年
-----	-------	----	--------

### (1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 明治維新と近代国家の形成
- イ 使用教材 『高等学校改訂版 日本史 A』（第一学習社）  
『プロムナード日本史』（浜島書店）、『江戸から東京へ』（東京都教育委員会）

### (2) 単元（題材）の指導目標

- ア 欧米諸国のアジア進出により国際社会に組み込まれた我が国について、社会、文化の変容や政治的対立と関連付けて考察し、我が国の近代国家形成の過程に対する課題意識を高めさせる。
- イ 富国強兵・殖産興業政策に向けて新政府が実施した一連の制度改革について、諸資料を根拠にして、明治政府のねらいや国民へ与えた影響など多角的な視点をもって考察させる。

### (3) 単元（題材）の評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 資料活用の技能	エ 知識・理解
①我が国の近代国家形成過程に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。	①明治政府の一連の制度改革から課題を見だし、富国強兵・殖産興業と関連付けて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	①明治政府の一連の制度改革に関する諸資料から、制度改革の実施理由等について、有用な情報を適切に選択している。	①我が国の近代国家形成過程について基本的な事柄を、欧米列強のアジア進出と関連付けて総合的に理解し、その知識を身に付けている。

### (4) 単元（題材）の指導と評価の計画（4 時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点				評価規準 (評価方法など)
		関	思	技	知	
第一次 (二時間扱い)	<p>【ねらい】 戊辰戦争の背景と経過を踏まえ、諸資料を活用しながら当時の庶民の世相を読み取り、近代国家の形成過程について関心を高めさせる。</p> <p>・幕末に庶民によって書かれた戊辰戦争に関する錦絵の諷刺画を読み解き、江戸の庶民の世相を読み取る。</p> <p>・戊辰戦争の背景と経過、新政府の発足過程を学び、明治政府の特徴を理解し、基本的な知識を理解する。</p>	●				<p>① 戊辰戦争に関する諷刺画「子をとり子とろ」から、江戸の庶民が旧幕府側を応援していること、新政府側が官軍となった情報も庶民が入手していることなどへの関心を高めている。(観察・ワークシートの記述)</p> <p>● ① 戊辰戦争では江戸城が無血開城されたこと、その後関東・東北地方では旧幕府側の抵抗が激化したことについて、欧米列強のアジア進出と関連付けて理解している。(ワークシートの記述)</p> <p>① 五箇条の御誓文と五榜の掲示を比較し、明治政府の基本方針が旧制度を引き継いだもので、支配される民衆側には特に変化がなかったことを理解している。(ワークシートの記述)</p>

第二次 (一時間扱い)(本時)	【ねらい】 欧米列強のアジア進出に着目させながら、なぜ明治政府が廃藩置県を行ったのか、資料に基づいて考察させる。			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>藩主と県令を比較する資料に基づき、藩と県の違いについて読み取ったことを、書き出す。</li> <li>廃藩置県の詔の資料や 18 世紀と 19 世紀後半の欧米列強のアジア進出の地図から、なぜ明治政府が廃藩置県を行ったのかその理由を考察し、ワークシートに記述する。</li> </ul>	●	●	<ul style="list-style-type: none"> <li>①藩主と県令を比較する資料から、藩と県の本質的な違いについて、有用な情報を適切に選択し、ワークシートに記入している。(ワークシートの記述)</li> <li>①諸資料から得た情報を根拠にして、明治政府が廃藩置県を行った理由とその歴史的意義について時間軸・空間軸の二つの視点をもって考察し、適切に表現している。(発問・ワークシートの記述)</li> </ul>
第三次 (二時間扱い)	【ねらい】 中央集権体制の確立により可能になった富国強兵・殖産興業政策の特徴と課題について理解させる。			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>「徴兵免役心得」から、徴兵免役の条件を知り、当時ならば自分が条件に当てはまるか照らし合わせ、当時の人々の思いに関心をもつ。</li> <li>徴兵令・地租改正などの一連の富国強兵政策が、幕藩体制ではできなかったことを学び、富国強兵・殖産興業政策の結果、国民の意識や生活がどのように変わっていったのか、理解する。</li> </ul>	●	●	<ul style="list-style-type: none"> <li>①「徴兵免役心得」から、徴兵令に対する関心と課題意識を高めている。(観察・発問)</li> <li>①富国強兵・殖産興業政策によって、西洋の近代思想や生活様式などが取り入れられたことを理解している。また我が国の急速な近代国家への歩みについて、列強のアジア侵略と関連付けて、総合的に理解している。(ノートやワークシートの記述)</li> </ul>
	・ペーパーテストの実施		○ ○ ○	

## (5) 本時 (全 4 時間中の 2 時間目)

### ア 本時の目標

- (ア) 幕藩体制と中央集権体制の特徴を廃藩置県に関連付けて、資料を基に把握させる。
- (イ) なぜ廃藩置県が行われたのか、資料に基づいて考察し、適切に表現させる。

### イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法
導入	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>前回の授業で学んだことを確認する。</li> <li>現在と 1871 年の日本地図を比較し、現在との違いをワークシートに書き出す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>戊辰戦争が終わり、明治維新によって一連の改革を始めていったことをノートで確認させる。</li> <li>多摩地区が神奈川県になっていることに着目させる。</li> </ul>	
展開	35分	<ul style="list-style-type: none"> <li>「江戸から東京へ」P54 の学びの窓から、廃藩置県について考える。</li> <li>ワークシートに基づき、藩主と県令を比較し、その特徴から藩と県の違いについて読み取ったことを書き出す。</li> <li>既習事項の版籍奉還を振り返り、藩主はそれまで土地と民衆を支配していたという点に気付く。</li> <li>廃藩置県の詔の中から、明治政府が廃藩置県を行った理由について考えるためのキーワードを書き出す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>なぜ加賀の大名の屋敷が東京にあるのか考察させることで、廃藩置県の目的に気付かせる。</li> <li>ワークシートを配布し、プロジェクターで作業手順を提示する。その後、参考資料1を配布する。机間指導に多く時間を割き、書けていない生徒には、情報の中のどこに着目すべきか指摘する。</li> <li>プロジェクターで幕藩体制の図を見せ、幕藩体制の特徴を把握させる。その後、明治政府の政策によって体制がどのように変わっていったか発問する。</li> <li>現代語訳を読ませながら、「万国対峙」というキーワードを見付けさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>藩主と県令を比較する資料から、藩と県の本質的な違いについて、有用な情報を適切に選択し、ワークシートに記入している。(ウー①)(発問・ワークシートの記述)</li> </ul>



展 開		<ul style="list-style-type: none"> <li>18 世紀・19 世紀後半の二つのアジア地図を比較し、列強のアジア進出と当時の日本人が抱いていた危機感に気付き、我が国が取るべき道を考察し、考えを書き出す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>時間軸・空間軸の二つの視点を生徒に意識させ、欧米列強のアジア進出の視点と廃藩置県、中央集権化を結び付けて考えさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>諸資料から得た情報を根拠にして、明治政府が廃藩置県を行った理由とその歴史的意義について時間軸・空間軸の二つの視点をもって考察し、適切に表現している。(イー①)(ワークシートの記述)</li> </ul>
ま と め	5 分	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時のまとめを行う。</li> <li>次回学習することを確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時に学んだことをまとめとして説明することで、生徒たちが学習した内容を確認できるようにする。</li> <li>次回以降の学習について触れる。地租改正、徴兵制、学制などの改革が廃藩置県後急速に進められたことを指摘する。</li> </ul>	

## ウ 評価の実際

### 評価場面 2 思考・判断・表現 (第二次)

廃藩置県の詔の資料や 18 世紀と 19 世紀後半の欧米列強のアジア進出の地図から、なぜ明治政府が廃藩置県を行ったのかその理由を考察し、ワークシートに記述する。

**評価規準【思】** 諸資料から得た情報を根拠にして、明治政府が廃藩置県を行った理由とその歴史的意義について時間軸・空間軸の二つの視点をもって考察し、適切に表現している。

#### 【「おおむね満足できる」状況 (B) と評価される例】

- 19 世紀後半、欧米列強によってアジアが植民地化されていったことを読み取り、明治政府がなぜ廃藩置県を行ったのか考察し、自分の考えを表現することができている。

〈生徒の記述例〉

- 19 世紀後半の地図ではアジアの多くの国が欧米列強の支配下に入っている。廃藩置県の詔にもある通り、明治政府は、このような世界の情勢も踏まえ、欧米列強の国々と対等な関係を築きたいと考え、そのために強い力をもった国をつくらうとしたのだと思う。廃藩置県もそのために行ったと思う。

#### 【「十分満足できる」状況 (A) と評価される例】

- 二つの地図を比較し、この 100 年の間で欧米列強が急速にアジア植民地化を進めていることを読み取り、廃藩置県の意義を考えつつ、明治政府が中央集権的国家を目指していったことに気付き、その考えを幕藩体制と比較しながら表現することができている。

〈生徒の記述例〉

- 18 世紀から 19 世紀後半までの間に、アジアの多くの国が列強の植民地となったことが地図から分かる。このことから明治政府は、列強の植民地にされることへの強い危機感があったと考える。列強に対抗するためには徴税権や軍事権を統一し、近代国家を形成する必要がある。そのため廃藩置県によって幕藩体制を終わらせ、徴税権や軍事権を全て政府が掌握した

中央集権国家をつくろうと考えたのだと思う。

【「努力を要する」状況（C）と評価される生徒の例と教師の指導】

生徒の状況	教師の指導
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 廃藩置県の詔の中から、キーワードを探すことができていない。</li> <li>・ 地図などの資料を見ているが、列強諸国のアジア進出について書き出せていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 読む場所を指示し、その資料を出させる。その上で、分からないようであればヒントを提示する。</li> <li>・ 地図上で示されている列強諸国がアジアのどの地域に進出しているか、ヒントを提示する。</li> </ul>

[定期考査問題の例]

廃藩置県について、以下の表を見て設問に答えなさい。【思】

表1：明治元年の各藩の財政状況（抜粋）（下山三郎『近代天皇制研究序説』岩波書店から作成）

藩名	収入	支出	残高	支出が収入の何倍か
薩摩	112万円	199万円	-87万円	1.8倍
熊本	142万円	230万円	-88万円	1.6倍
福岡	78万円	260万円	-182万円	3.3倍
佐賀	82万円	190万円	-108万円	2.3倍
土佐	93万円	197万円	-104万円	2.1倍
徳島	78万円	186万円	-108万円	2.4倍
長州	95万円	342万円	-247万円	3.6倍
広島	96万円	249万円	-153万円	2.6倍
岡山	65万円	207万円	-142万円	3.2倍
鳥取	59万円	166万円	-107万円	2.8倍
和歌山	105万円	342万円	-237万円	3.3倍
金沢	294万円	386万円	-92万円	1.3倍
名古屋	121万円	413万円	-292万円	3.4倍
静岡	79万円	53万円	26万円	0.7倍
久保田	69万円	319万円	-250万円	4.6倍
久留米	48万円	179万円	-131万円	3.7倍
津	48万円	338万円	-290万円	7.0倍
彦根	35万円	169万円	-134万円	4.8倍
姫路	33万円	122万円	-89万円	3.7倍
仙台	24万円	140万円	-116万円	5.8倍
平均	88万円	234万円	-147万円	2.7倍

設問1 表1から読み取れる特徴を三つ以上書きなさい。【技】

設問2 表1から読み取れる各藩の状況を踏まえ、廃藩置県が実施された際、多くの反乱を予想して1万人の軍隊を整えた新政府の予想を裏切り反乱は起こらなかった。なぜ一つの反乱も起こらず廃藩置県が行われたのか考え、説明しなさい。（なお、こうした各藩の状況を踏まえ、新政府側が廃藩置県を行う見返りとして、どのような政策を藩側に提示したかについても考えてみること）【思】

〈設問2に対する生徒の解答例〉

- ・ 「ほぼ全部の藩が、取り返しがつかないほどの支出をしていたが、廃藩置県を行えば、その見返りとして、その支出額をなんとかするのと同時に今までの藩主を華族として生活を保障するという案を提示したのではないか。そのため反乱も起こらず廃藩置県が実施できたと考える。」
- ・ 「財政的に大変だった藩に、廃藩置県をすれば政府が財政赤字を代わりに立て替えてくれることにすればいい。それだけでなく給料的なものの保障や、身分などを高くしてくれたため、反乱が起こらなかったと考えます。」
- ・ 「財政危機までにくらんだ藩の債務を新政府がなくしてくれたからではないだろうか。また今までの給料や身分を保障してくれたから一つの藩も反乱を起こさなかった。」

(6) 本時の振り返り

ア 仮説の検証

(ア) 仮説1の検証

時間軸と空間軸を重視した資料を提示したことで日本史の枠にとらわれることなく、世界的・地理的視点を取り入れ、産業革命後の欧米列強のアジア進出、アヘン戦争の結果などを関連付けて幕末という時代を考察した生徒がワークシートの記述から生徒全体の64%に達し、思考力・判断力・表現力を養うことができたと言える。

(イ) 仮説2の検証

評価の実際において、具体的な評価場面を設定し、「おおむね満足できる」状況(B)、



「十分満足できる」状況(A)を明確に設定したことで、その規準に照らし合わせて、生徒のワークシートから思考力・判断力・表現力を、客観性をもって評価することができた。「努力を要する」状況(C)と評価される生徒を授業中に3人見付けることができ、その生徒に対して、評価場面ごとに適切な指導をすることができた。

#### (ウ) 仮説3の検証

思考力・判断力・表現力を育成するため、与えられた資料を根拠にして思考力・判断力・表現力を問う論述問題を含んだ定期考査を作成した。前回の試験の論述問題と比較すると、54%の生徒が解答用紙約50字分の記述量が増えており、この記述量の増加から、資料を読み、根拠に基づいて思考力・判断力・表現力を使うことで、以前よりも論述問題に対する関心や意欲の高まりが見られたと言える。また、「思考・判断・表現」の評価の低い生徒に対して、評価規準を解説するなどの指導を行った結果、定期考査では前回より12点も点数を上げた生徒もおり、評価と指導の一体化に結び付ける道筋が見えた。

### イ 成果と課題

#### (7) 成果

生徒の思考力・判断力・表現力を育成するため、時間軸・空間軸の二つの視点を重視した地図や年表を掲載した資料作成と、思考の過程を踏まえ段階的に工夫した発問を投げかけた。このことにより、答えていくうちに徐々に生徒の思考が深まり、結果としてこれまで全く意見を書けていなかった生徒が自分の考えをワークシートに書き出し、更に諸資料を根拠にして自分の考えを書くことができるようになった。定期考査においては、授業で学んだ知識を応用して、初見の資料から、いかに情報を読み取り、その情報を基に思考力・判断力・表現力を身に付けられるか、テスト問題にも工夫を加えた。その結果、思考力・判断力・表現力を問う設問で、72%の生徒が、自分の考えを解答用紙に書き込むことができ、そのうち30.7%の生徒が十分に満足できる状況(A)の評価の解答を書くことができた。また、解答欄が空欄だった生徒は全体の28%だった。この結果から、おおむね資料に基づいて思考力・判断力・表現力を育成することができたと言える。またこうした取組を続けることで成果を更に挙げることができると推察できる。

#### (1) 課題

時間軸・空間軸の二つの視点を重視した資料を数点作成したが、作成した資料を精選するという点においては不十分で、その結果、思考力・判断力・表現力を育むよりは、資料活用の技能を育むことにとどまってしまったとの指摘があった。これを踏まえて、更に資料の精選を行い、授業内で思考の時間をもっと確保すること、また生徒の思考した内容を表現させる場を設け、グループワークや発表を通して、生徒同士で情報を共有させ、更に思考を深めさせることが課題である。

定期考査の思考力・判断力・表現力を問う問題では、生徒の事後アンケートによると、考える時間・書く時間ともに足りなかったとの意見が多かった。また平均点も前回の「知識・理解」の観点の評価する問題が多いテストに比べ、9.8点も低くなった。この点に関しては、授業内でより多くの考える時間や表現する時間を確保し、年間を通してそれらの経験を積みさせることで、生徒も考えたことを表現することに慣れてくると考えられる。思考力・判断力・表現力を育む授業と学習評価の継続的な実践が今後の課題である。

## 2 実践事例Ⅲ

科目名	世界史A	学年	第2学年
-----	------	----	------

### (1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 ウィーン体制と諸国民の春  
 イ 使用教材 『新版 世界史A』（実教出版）、『プロムナード世界史』（浜島書店）  
 『江戸から東京へ』（東京都教育委員会）

### (2) 単元（題材）の指導目標

- ア 絶対王政の終えんと市民社会の広がりについて、ウィーン体制と諸国民の春までの歴史的過程を多面的・多角的に考察させる。

### (3) 評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 資料活用 の 技能	エ 知識・理解
①絶対王政の終えんと市民社会の広がりについて、関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。	①絶対王政の終えんと市民社会の広がりについて、諸資料から課題を見だし社会的事象と関連付けて多面的・多角的に考察しその過程や結果を適切に表現している。	①絶対王政の終えんと市民社会の広がりについて、風刺画・文字資料や絵画、写真などの図像資料から有用な情報を適切に選択し、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	①絶対王政の終えんと市民社会の広がりについて、理解し、その知識を身に付けている。

### (4) 単元（題材）の指導と評価の計画（3時間扱い）

時間	学習活動	評価の観点				評価規準 (評価方法など)
		関	思	技	知	
第一次 (二時間扱い) (本時)	<p><b>【ねらい】</b> 諸資料を活用しフランス革命からウィーン体制成立の頃までの歴史の大きな流れを基に、各国の利害対立の様子について考察させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>三つの地図（①フランス革命前②ナポレオン支配③ウィーン体制）から領土の移り変わりについて、グループワークを通してワークシートに整理し、グループで発表する。</li> <li>最初に活用したウィーン体制の絵を再度用いて、メッテルニヒの立場から当時のヨーロッパ各国の思惑についてワークシートに表現する。</li> </ul>			●		<ul style="list-style-type: none"> <li>①地図を比較し、相互に関連付けることでヨーロッパ各国の領土の変化に関する関心を高め、グループで話し合い、各国の領土の変化や思惑についてワークシートに適切に表現している。 (グループワークの様子、ワークシートの記述)</li> <li>①風刺画を活用してウィーン会議の歴史的な意義を理解し、適切に表現している。(ワークシートの記述、グループワークの取組)</li> </ul>
	<p><b>【ねらい】</b> 諸資料を活用し、ウィーン体制の崩壊に向かう過程と1848年の革命（諸国民の春）について理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ウィーン体制成立後ヨーロッパ各地で起こった「自由主義」と「国民主義」の運動について内容を理解するとともに、地図を活用してまとめる。</li> <li>1848年革命（諸国民の春）について、教師の説明とワークシートへの記入で理解する。</li> </ul>			●	●	<ul style="list-style-type: none"> <li>①ウィーン体制に対する抵抗運動について各地域における運動の特色を理解し地図をまとめることでその広がりを空間軸で捉えている。(ワークシートの記述)</li> <li>①教師の説明とワークシートに取り組むことで二月革命、三月革命によって変化した点について理解している。(ワークシートの記述)</li> </ul>

第三次(一時間扱)	【ねらい】 諸資料を活用し、フランス革命以降のヨーロッパ情勢がラテンアメリカの独立に大きな影響を与えるとともに、日本に与えた影響について考察させる。			
	<ul style="list-style-type: none"> <li>ラテンアメリカの独立した年号の特徴を主題図から読み取り、ナポレオンの影響、アメリカ・イギリスの立場からラテンアメリカが独立できた理由を考察する。</li> <li>教科書「江戸から東京へ」を活用してアヘン戦争と洋式砲撃訓練の必要性を考え理解する。</li> </ul>	●	●	<ul style="list-style-type: none"> <li>①独立がウィーン体制の中で達成されていることに主題図の年号から気付き、ウィーン体制の影響と独立の因果関係について既習事項や文字史料を根拠に適切にまとめている。(ワークシートの記述、グループワークの取組)</li> <li>①資料を活用して、ラテンアメリカの独立運動が成功した要因をワークシートに適切に表現している。(ワークシートの記述)</li> </ul>
	・ペーパーテストの実施	○	○	○

### (5) 本時(全3時間中の1時間目)

#### ア 本時の目標

- (ア) 諸資料を通して1814年頃のヨーロッパ各国の利害対立について考察させる。
- (イ) 地図資料の変化を読み取らせるとともに、グループワークを通して発表させることで当時のヨーロッパの勢力の変化を理解させる。

#### イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時のテーマを理解する</li> <li>ウィーン会議の絵(風刺画)を見て、発問について考察する。 発問「ナポレオンに対して言うとしたら何と言うだろうか？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICTを活用して生徒の興味を引き出す。</li> <li>前時の既習事項を振り返る。</li> <li>ナポレオンの画像も提示する。</li> </ul>	
展開	35分	<ul style="list-style-type: none"> <li>ウィーン会議の風刺画を見て、発問について考察する。 発問「なぜ風刺画はこのような描かれているのだろうか？風刺画の特徴に着目してそのように描かれた理由を書き出してみよう。」</li> <li>地図資料からヨーロッパの領土の変遷を読み取り、グループワークを通して意見をまとめて発表する。</li> <li>三つの地図を比較して気付いたことをまとめる。発問について考察する。 発問「なぜ、ウィーン体制でこのような領土になったのか。正統主義の考え方を踏まえて考えてみよう。」</li> <li>地図から読み取り気付いたことをグループごとにまとめ、発表する。</li> <li>導入で用いた風刺画を再度見て考察する。 発問「風刺画は何を表していたのだろうか？」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵画と風刺画の違いに着目させる。普墺露が絶対王政の国であるということ、フランス革命前の絶対王政全盛期への回帰(=正統主義)を望んでいることに気付かせる。</li> <li>特徴的な国や地域を指摘して自分で違いや変化について気付くように助言をする。</li> <li>グループワークしやすいように机を移動させる。</li> <li>風刺画の中で、会議の場にもかかわらず各国の代表が踊る様子に着目させ、主要国が領土を争い対立している様子を読み取らせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地図を比較し、相互に関連付けることでヨーロッパ各国の領土の変化に関する関心を高め、グループで話し合い、各国の領土の変化や思惑についてワークシートに適切に表現している。(ア-①、ウ-①)(グループワークの様子。ワークシートの記述)</li> </ul>
まとめ	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>導入で用いた会議の絵画資料を見てウィーン会議の歴史的な意義について考察し、まとめる。</li> <li>本時の学習について理解度と取組を自己評価する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>正統主義、勢力均衡の関係を整理し、まとめられるよう、机間指導・助言する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>導入時に活用した風刺画を再度活用し、ウィーン会議の歴史的な意義を理解し、適切に表現している。(イ-①、エ-①)(ワークシートの記述)</li> </ul>

ウ 評価の実際

— 評価場面2 思考・判断・表現

最初に活用した風刺画を再度用いて、当時のヨーロッパ各国の思惑について自分の言葉で表現する。

評価規準【思】 導入時に活用した風刺画を再度活用し、ウィーン会議の歴史的な意義を理解し、適切に表現している。

【「おおむね満足できる」状況（B）と評価される例】

- ・授業の内容を振り返り、ナポレオンの影響を排除して絶対王政を復活させること、もしくは領土を拡大して大国の領土を均衡させることの二つの目的のどちらかが記述されている。

〈生徒の記述例〉

- ・小国のことは気にしないで、自分たちのような大きな国の絶対王政と領土拡大を目指そう。

【「十分満足できる」(A)と評価される例】

- ・主要五大国のなかに「本音」の部分と「建前」の部分があり、絶対王政を復活させるための「正統主義」を採択しながらも、領土に関しては小国を取り込み、領土を拡大する様子を、授業の展開の中から理解した上で、正統主義と勢力均衡のつながりについてを正確に理解し、適切に表現できている。

〈生徒の記述例〉

- ・領土拡大を前面に出してしまつたらうまく話が進まなくなってしまう。だから正統主義の考え方に賛成してもらい、領土についても大国に領土が集まって勢力均衡が果たせるように会議を進めよう。

【「努力を要する」状況（C）と評価される生徒の例と教師の指導】

生徒の状況	教師の指導
・正統主義や勢力均衡について基礎基本の知識が整理できていない	・ワークシートを振り返り、資料を読み取る視点を示し改めて用語について板書で整理しなおす。

[ペーパーテスト]

— 思考・判断・表現

風刺画から読み取れるウィーン体制の崩壊による絶対王政の終えんと、ラテンアメリカ諸国の独立について、ヨーロッパ各国の自由主義・ナショナリズム運動及び市民社会の広がりに着目しながらその歴史的な意義について考察させ、表現させる。

評価規準【思】 風刺画を正確に読み取ってヨーロッパ各地やラテンアメリカで起こった変化やその歴史的な意義について、歴史的な大きな流れを踏まえて適切に表現している。

問題6、地図にある【A】～【D】の写真（出来事）と以下の風刺画【E】「1848年 諸国民の春」から「絵や文字」を参考に風刺画の表す内容について読み取って、19世紀のヨーロッパやラテンアメリカに起こった出来事に関する歴史的意義とは何かについて、以下のキーワードを必ず用いて説明しなさい。

【思考・判断・表現】「絶対王政」「植民地」「独立」「自由主義」「ナショナリズム」

【E】風刺画「1848年 諸国民の春」

【「おおむね満足できる」状況（B）と評価される例】

- ・授業の内容を振り返り、五つの用語が適切に使用され記述されるとともに、時系列で整理され因果関係が正しく記述されている。

〈生徒の記述例〉

- ・革命やナポレオンの影響で市民の間にも自由主義的な考え方が広がり、絶対王政は終わった。多くの植民地でナショナリズムが高まり民族運動が起こり独立を果たす国も出てきた。

【「十分満足できる」（A）と評価される例】

- ・本単元の三時間を総合してまとめるだけでなく、その前の単元であるフランス革命やナポレオン戦争など 18 世紀末から 1848 年までの変化について風刺画を通して読み取り記述し、「歴史的意義」についても十分記述されている。

〈生徒の記述例〉

- ・18 世紀末のヨーロッパで起こった市民革命やウィーン体制の崩壊により絶対王政は終えんし、ラテンアメリカ諸国では植民地からの独立を果たした。ヨーロッパ各国では自由主義やナショナリズム運動が高揚し、民族運動が活発化して市民社会が広がるようになった。

【「努力を要する」状況（C）と評価される生徒の例と教師の指導】

生徒の状況	教師の指導
・絶対王政、植民地などの用語の関係を理解できていない。	→ 二つの用語の関係性を理解させながら全体像を理解させる。

(6) 本時の振り返り

ア 仮説の検証

(ア) 仮説 1 の検証

本授業ではヨーロッパの領土の変遷を示した地図を 3 枚用いた。時間軸と空間軸を重視した資料を複数枚提示したことで、絵画史料の比較や既習事項とのつながりなど、多面的・多角的な視点がもてたことや大きな歴史の流れを把握することで歴史的な視野が広がったことが生徒のワークシートの記述から明らかになった。また、グループワークでは一人一人の意見や考えの中には資料を十分に読み取れていないものもあった。しかし、協議を進めるうちに、複数の資料に基づく様々な意見が出るため、その意見を取捨選択し解答を考えさせる過程でも生徒の思考力・判断力・表現力を育成できたと言える。

(イ) 仮説 2 の検証

評価の実際において、授業を構成する際に「努力を要する」状況（C）を設定することで生徒の学習でのつまずきに教師が気づきやすくなり、生徒一人一人に対する個別の指導が行いやすくなった。また、「おおむね満足できる」状況（B）という到達点をはっきりさせることで、学習の苦手な生徒でも考えやすいスモールステップによる小さな発問を準備するなどの工夫がしやすくなった。その結果、生徒が思考し、判断し、表現する上での小さな成長を適切に評価しやすくなった。

(ウ) 仮説 3 の検証

今回の検証授業のワークシートやペーパーテストの解答の分析から、スモールステップにより生徒の思考過程を明確にさせることで生徒の学習状況が把握しやすく、授業改善にもつなげやすくなることが理解できた。また、ペーパーテストでもこれまで以上に



思考力・判断力・表現力の到達度を確認する問題を作成しやすくなった。

しかし、生徒の現状を把握することは確認できたが、今回の単元だけでは、そこから授業改善につながる検証を行うことはできなかった。また、実際に今回授業内で評価された力がペーパーテストになると現れていないことが多く見られた。評価場面の設定や評価規準の作成など何が「適切」なのかを研究する必要がある。

## イ 成果と課題

### (ア) 成果

今回の授業では、ウィーン体制に関する絵画資料や領土拡張の変遷を示した地図資料を提示して、生徒が主体的に考察し表現できるよう授業展開を留意した。また授業内に意図的にグループワークの時間を作り生徒同士の学び合いの場を設定した。その結果、資料を多面的・多角的に読み取った生徒から様々な発言が生まれ、資料を読み取り、思考し、判断し、表現する一連の活動が深まった。そこで本授業の成果として特に次の2点を挙げる。1点目は、生徒の取り組む意欲や姿勢の変化である。2学期から授業で使うワークシートに毎回思考力を育成する問いを設定しているが、授業を迫うごとに記述内容の質も量も向上している。ワークシートは次の授業の始めに評価を付けて返却している。生徒はその評価を見ることで常に自らの学習を振り返り、次の授業への意識付けとなっている。また今回、評価の場面に、グループワークで取り組むワークシートを設定した。その結果、全体場で発言することが苦手な生徒が、グループを通して自らの考えを「表現」する場ともなった。グループワークを活用して評価の場面を設定することで、初めて評価される機会が得られる生徒がいることが分かった。2点目は、今まで以上に生徒の実情に合わせた授業を構成できるようになったことである。あらかじめ評価規準を明確にし、「おおむね満足できる」状況（B）に向けてスモールステップを設定する。すると、生徒の理解が不十分な点やつまずきのある点、そして生徒の思考過程が把握しやすくなった。その結果、個に応じた指導や評価場面の設定を臨機応変にできるので、生徒を様々な面から適切に評価するきっかけを作ることができた。また、授業者としても生徒の取組を評価し自らの授業を振り返ることで、授業改善に取り組みやすくなり、生徒一人一人への学習の定着を図ることができた。

### (イ) 課題

今回の検証授業を通して明らかになった課題は2点ある。1点目は、思考力を伸ばす評価をするための授業を重視するあまり、学んだ内容を知識として定着させる時間が不十分となったことである。今回の授業でも生徒の積極的な学び合いが形成できていたが、どうしても思考し、判断し、表現する活動には時間を取られてしまい、ペーパーテストの結果から、授業の内容が知識として定着できていない生徒が多いことが分かった。授業内で考えさせるにとどまらず、そこで得た知識の整理を促す指導も必要である。2点目は、評価に対する生徒の振り返り場面の設定である。今回の評価方法では、評価するだけに終わらず、生徒が自らの学習を具体的に振り返る場面を設定することが必要である。振り返りを活用することで、学習内容の定着を図ることもできる。ただし、一連の指導の準備には相応の時間がかかるため、単元の中で活用できるタイミングをつかみ効果的に取り組むなど焦点化することも必要である。



## 2 実践事例Ⅳ

科目名	地理B	学年	第2・3年次
-----	-----	----	--------

### (1) 単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

- ア 単元名 近年経済成長の著しいインドは、今後も経済成長を続けられるだろうか
- イ 使用教材 『地理B』（東京書籍）、『新詳高等地図初訂版』（帝国書院）、『最新地理図表』（第一学習社）、『地理統計要覧』（二宮書店）、『江戸から東京へ』（東京都教育委員会）

### (2) 単元（題材）の指導目標

- ア インドの社会の構造や経済の変容について、生活文化や歴史的背景を踏まえて多面的・多角的に考察させる。
- イ 諸資料から、インドの産業の変化や特徴などを読み取ることを通して、経済成長の背景や要因について考察させる。

### (3) 評価規準

ア 関心・意欲・態度	イ 思考・判断・表現	ウ 資料活用の技能	エ 知識・理解
①インドの生活文化の地域的特色、経済成長の背景や要因に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究している。	①インドの経済について、基礎的知識や諸資料を基に多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	①インドの生活文化や経済成長等について、諸資料から、有用な情報を選択し、読み取ったり図表にまとめたりしている。	①インドの地域的特色や課題について、経済に関する事象を生活文化、産業等の他の事象と有機的に関連付けて理解している。

### (4) 単元（題材）の指導と評価の計画（4時間扱い）

＜「現代世界の諸地域」の指導計画 50時間扱い＞

地域（配当時間）【区分の指標】《考察方法》	単元の中心となる問いの例・指導中の主な指示の例 ◎地球的課題等に関する問いの例
中国（5時間）【経済】 《静態地誌的な考察》	GDP 2位に経済成長した中国の社会はどのようなものだろうか。 ・中国市場の特徴や人口、外国資本などと関連付けて考えてみよう。 ◎中国の経済発展は世界の国々にどのような影響を与えているのだろうか。
東南アジア（5時間） 【政治】 《静態地誌的な考察》	ASEAN諸国はどのような国のまとまりなのだろうか。 ・ASEAN諸国の政治・経済・文化や地理的特徴について考えてみよう。 ◎ASEAN諸国の工業化は世界にどのような影響を与えているのだろうか。
インド（4時間・本単元） 【経済】 《動態地誌的な考察》	近年経済成長の著しいインドは、今後も経済成長を続けられるのだろうか。 ・インドの人々の生活や文化、経済の特徴と変化について考えてみよう。 ◎インドにおける人口問題について考えてみよう。
西アジア・北アフリカ（4時間）【文化】 《比較地誌的な考察》	イスラム教を信仰する西アジアと北アフリカの違いは何だろうか。 ・文化や宗教、自然環境などにおける共通点と相違点について考えてみよう。 ◎パレスチナ問題について考えてみよう。
サハラ以南のアフリカ（4時間）【自然】 《静態地誌的な考察》	なぜ、サハラ以南は世界で最も低い開発地域となっているのだろうか。 ・サハラ以南のアフリカの自然や歴史、文化を踏まえ、現状について考えてみよう。 ◎紛争、エイズ、人口問題などを解決するにはどうしたらよいか考えてみよう。
北・西欧諸国と南・東欧諸国（6時間） 【政治】 《比較地誌的な考察》	なぜ、北・西欧諸国は南・東欧諸国に比べてGNIが高いのだろうか。 ・北・西欧諸国と南・東欧諸国の産業構造、賃金、失業率、外国人労働者などについて諸資料を基に比較してみよう。 ◎学習を通して、EUとして統一するヨーロッパの諸課題について考えてみよう。
ロシア（5時間） 【政治】 《静態地誌的な考察》	広大な国土と多様な自然環境をもつロシアはどのような国なのだろうか。 ・ソ連解体やCIS誕生など、歴史的背景を踏まえてロシアの成り立ちや変容について考えてみよう。◎チェチェン紛争を通して紛争の背景について考えてみよう。
アメリカ合衆国（6時間）【経済】 《動態地誌的な考察》	なぜ、アメリカ合衆国は世界で最も影響力のある国なのだろうか。 ・アメリカ合衆国の影響力について政治・経済・歴史などの面から考えてみよう。 ◎アメリカ合衆国の経済の停滞は世界にどのような影響を与えているのだろうか。
ラテンアメリカ（5時間）【経済】 《動態地誌的な考察》	なぜ、ブラジルをはじめラテンアメリカは経済成長が著しいのだろうか。 ・ラテンアメリカの自然環境を踏まえ、経済成長の背景について考えてみよう。 ◎モノカルチャー経済から脱却の必要性について考えてみよう。

オセアニア諸国（6時間）【政治】 《動態地誌的な考察》	なぜ、近年、オセアニア諸国はアジアとのつながりを強めているのだろうか。 ・オセアニアに移住する人々の出身地の変化から、アジアとオセアニアのつながりについて考えてみよう。◎オセアニアと日本との関わりについて考えてみよう。
--------------------------------	--

第一次 「カースト制に基づくインドの生活文化と経済への影響を考察しよう」（1時間）

第二次 「インドの産業の歴史と現状について追究しよう」（2時間）

第三次 「インドは今後も経済成長を続けられるか、考察しよう」（1時間）

時間	学習活動	評価の観点				評価規準 (評価方法など)
		関	思	技	知	
第一次 (本時)	【ねらい】インドの経済の急激な成長の実態を把握し、その背景にあるインドの人々の生活について、信仰や文化の面から考察させる。					
	【問】カースト制はインドの経済発展にどのような影響を与えているのだろうか？					
	<ul style="list-style-type: none"> <li>インド経済の成長の資料を見て学習課題を確認する。</li> <li>インドの人々の暮らしについての資料を読み、疑問に感じたことを挙げる。</li> <li>インドの経済発展とジャーティの関係について考察し、文章で表現する。</li> </ul>	●				<ul style="list-style-type: none"> <li>①インドの生活文化について関心を高め、特徴を捉えている。(観察・ワークシートの記述)</li> <li>①カースト制をインド人の職業選択と関連付けて考察し、その過程や結果を適切に表現している。(ワークシートの記述)</li> </ul>
第二次 (二時間目)	【ねらい】歴史的背景を踏まえ、経済体制や農業、産業などの移り変わりについて考察させる。					
	【問】インドの産業はどのように変化していったのだろうか？					
	<ul style="list-style-type: none"> <li>独立後のインドにおける経済体制の変容について歴史的背景を踏まえ理解する。</li> <li>農産物の生産量の推移や1970年代の農村での変化、現在のインドの農業生産はどうなっているのかなどについて諸資料から読み取る。</li> </ul>			●		<ul style="list-style-type: none"> <li>①混合経済、新経済政策について理解している。(考査)</li> <li>①諸資料から、土地生産性が上がったなど、緑の革命により起きた変化を読み取りワークシートにまとめている。(ワークシートの記述)</li> </ul>
第二次 (二時間目)	【問】なぜ、インドは経済発展をとげることができたのだろうか？					
	<ul style="list-style-type: none"> <li>諸資料から新中間層の増加を読み取り、背景にあるインドの産業の特徴について考察する。</li> <li>諸資料からインドでIT産業が発達した要因を考察し、江戸川区を例に『江戸から東京へ』を活用しながら日本に住むインド人の実態と現状を理解する。</li> </ul>		●		●	<ul style="list-style-type: none"> <li>①背景に、どのような産業の発展があったのか、新経済政策を踏まえて考察している。(観察・ワークシートの記述)</li> <li>①IT産業がジャーティにない新しい職業であることに気がつき、インドの社会構造の変容を文章でまとめている。(ワークシートの記述)</li> </ul>
第三次	【ねらい】学習を通じて、インドの内外で生じている諸課題を見だし、インドが今後も経済成長を続けることができるのか考察させる。					
	【問】インドは今後も経済成長を続けることができるだろうか。					
	<ul style="list-style-type: none"> <li>諸資料からインドが抱える地球的課題や変化を読み取る。</li> <li>学習を通して、インドは今後も経済成長を続けられるかどうかについて考察し、文章にまとめ発表する。</li> </ul>		●		●	<ul style="list-style-type: none"> <li>①諸資料から経済発展の地域差や人口の特徴を読み取っている。(ワークシートの記述)</li> <li>①インド経済の今後の展望について考察し、自分の考えをまとめ、理由とともに発表している。(発表・ワークシートの記述)</li> </ul>

### (5) 本時（全4時間中の1時間目）

ア 本時の目標

(ア) インドの人々の暮らしについて、日本の暮らしとの相違点などを見いださせることで関心を高めさせる。

(イ) 諸資料からカースト制と職業の関係について考察させ、その過程や結果を表現させる。

## イ 本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・方法 (ア～エ)
導入	5分	<ul style="list-style-type: none"> <li>BRICsの4カ国を確認し、インドのGDPの成長の推移を表すグラフを見て単元全体の学習課題を把握する。</li> <li>本時のテーマを確認する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インドが近年経済成長していることを確認させ、今後も発展が続けられるだろうかという問題提起をする。</li> </ul>	
展開	35分	<ul style="list-style-type: none"> <li>インドの人々の暮らしについての資料を読み、その特徴や疑問点等をワークシートに記入する。</li> <li>ヒンドゥー社会に根づくカースト制について教師の話を開き理解する。</li> <li>インドの生活や文化に関する諸資料を見て、カースト制とインド人の職業選択の関わりについてイメージマップを作成し、文章で表現する。</li> <li>カースト制とインド人の職業選択の関連性について、教師の補足説明を聞く。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分たちの生活文化と比較させることで、生徒が特徴を捉えやすくする。</li> <li>カースト制についての説明を簡潔に行う。</li> <li>イメージマップには資料から読み取ったことをできるだけ多く記入させ、時間があれば、考察した結果を発表させる。</li> <li>経済が豊かになりつつも、カースト制がその足かせになっている側面があることについて説明する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インドの生活文化について関心を高め、特徴を捉えている。(ア①)(観察、ワークシートの記録)</li> <li>カースト制をインド人の職業選択と関連付けて考察し、その過程や結果を適切に表現している。(イ①)(ワークシートの記述)</li> </ul>
まとめ	10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>カースト制が現在のインド経済にどのような影響を与えているか考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本時の授業内容を踏まえさせた上で、カースト制が経済に与えている影響についてワークシートに記入させる。</li> </ul>	

## ウ 評価の実際

### 評価場面1 関心・意欲・態度

ワークシートにあるインド人の生活に関する文章を読み、疑問に思う点(語句)、インドの生活の特徴等をワークシートに記入する。

**評価規準【関】** インドの生活文化について関心を高め、それを意欲的に追究しようとしている。

#### 【「おおむね満足できる」状況(B)と評価される例】

- 提示された文章から「ジャーティ」とは何かということに疑問をもったり、日本と異なり同じ職業の人同士で結婚したりすることがインドでは基本であることや食事は主に菜食であることに着目したりしている。また、農村部と都市部の生活の違いについて着目している。

<生徒の記述例>

- 食事は主に菜食で、都市と農村部での格差が大きい。

#### 【「十分満足できる」状況(A)と評価される例】

- 日本と異なるインドの文化に疑問をもったり着目したりすることにとどまらず、例えば菜食中心なのはヒンドゥー教徒やイスラム教徒が多いためであるということなど、それがなぜかということについても考えようとしている。

<生徒の記述例>

- 農村と都市の格差が大きい。また人々の食事は主に菜食だが、それはインド人の多くがヒンドゥー教徒であり、イスラム教徒も多いという宗教的な要因が考えられる。

#### 【「努力を要する」状況(C)と評価される生徒の例と教師の指導】

生徒の状況	教師の指導
<ul style="list-style-type: none"> <li>インドの生活の特徴を記述できない。</li> <li>インドの生活文化について疑問点を挙げられない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教師の方で具体例を挙げる。</li> <li>日本の暮らしと比較させる。</li> </ul>

### 評価場面2 思考・判断・表現

別紙資料から、カースト制とインド人の職業選択の関係性について読み取り、イメージマップを作成した後、そのイメージマップを基に100字以内の文章でまとめる。

**評価規準【思】** カースト制とインド人の職業選択の関係性について、地誌的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。

【「おおむね満足できる」状況（B）と評価される例】

- ・インドでは職業は基本的に世襲制で、低カーストの人の救済措置があってもそれが有効に機能していないことなど、カースト制とインド人の職業選択の関連性を資料から読み取りワークシートに記述している。

<生徒の記述例>

- ・低カースト層の人たちは親と同じ職業に就くことが多く、字の読み書きができない人もインドには多くいる。公務員の定員に低カーストの枠を設けても高カーストの人に奪われて効果が出ていない。

【「十分満足できる」状況（A）と評価される例】

- ・職業は世襲制であり、低カーストのための救済措置が有効に機能していないことなどを資料から読み取るだけでなく、ヒンドゥー社会に根付くカースト制が、結果としてインド人の職業選択を制限している面もあるということについても言及している。

<生徒の記述例>

- ・現行の憲法はカースト制を否定しているが、現在でも多くのインドの人たちの職業は世襲制であるように、カースト制はインド人の職業選択に大きな影響を及ぼしている。

【「努力を要する」状況（C）と評価される生徒の例と教師の指導】

生徒の状況	教師の指導
<ul style="list-style-type: none"> <li>・カースト制とインド人の職業選択についての関連性を見いだすことができない。</li> <li>・イメージマップの記述内容を文章でまとめることができない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料の見方を示し、上位カーストと下位カーストの人々の違いに着目させる。</li> <li>イメージマップにある事項を整理させ論理的な文章構成になるように個別指導する。</li> </ul>

インド

年 組 番 名

★単元全体のテーマ★

～近年経済成長の著しいインドは、今後も経済成長を続けられるだろうか～

↓

今日のテーマ：経済成長著しい現在のインドについて文化や慣習の面から考察する



- インドの人々の暮らしはどんな暮らしだろうか？
- 疑問に思うところ(分らない言葉)にマーカーでチェックをする。
  - 下の括弧にインドの生活の特徴を挙げる。

人々の暮らし【農村】  
インド東部のアッサム地方の村に住むドーラさんは農家の主婦である。父が退んでくれた同じジェーティの夫は、大学で農学を学んでから村にもどり、労働者を雇って茶畑を耕作している。ドーラさんはつねにサリーをまとうているし、食事は素食であるため、肉や魚は食べない。近年は村でも自動車やコンピュータをもつ者も増えた。

人々の暮らし【都市】  
バンガロールに住むサニアさんはIT技術者で、工業団地の冷房つきの部屋でコンピュータソフトウェアの仕事をしている。十数年前に理科系の大学を出て就職した会社は、その後急成長して中堅のIT企業となった。いまではアメリカ合衆国や日本への出張もある。食事はおもに素食だが、たまに鶏肉や牛肉のカレーをつくる。休日には家族で外食することもある。

(金基淑『カーストから現代インドを知るための30章』明石書店 などより作成)

インドの生活の特徴

農村は農業、都市はIT関係(ソフトウェア) → 差

茶畑 カレー

サリー(民族衣装) ながいんだ髪

菜食

① ヒンドゥー教 が根付いた生活

→ ② カースト制 が影響する社会

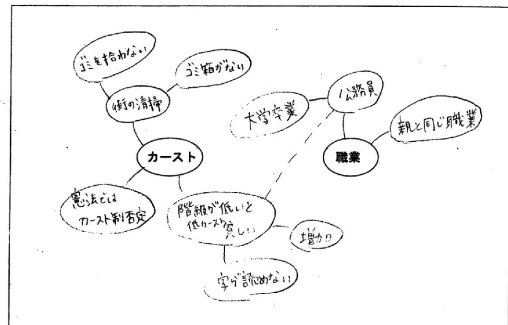
カースト制の社会ってどんな社会??



別紙の資料や写真から、カースト制度とインド人の職業選択には、どのような関係があると考えられるか、以下の手順に従ってまとめよ。

- 手順1：カースト制とインド人の職業選択についてイメージマップを作成する。
- 手順2：作成したイメージマップを基に、カースト制とインド人の職業選択の関係性を100字以内でまとめる。

<手順1>



<手順2>

インド人の中	でも	低カースト層の人たち	は
親と同じ職業に就く人が多く、	字の読み書き	ができない人も	インドには多くいる。
公務員の定員にカーストの枠を設けても	高カーストの人に奪われて	効果が出ていない。	



カースト制は現在のインドの経済発展にどのような影響を与えているだろうか？

高カーストの人たちの職業選択は多様化する一方で、経済発展に貢献できない人もある。

低カーストの人たちは格差が広がるばかりでついていけない。

(6) 本時の振り返り

ア 仮説の検証

(ア) 仮説1の検証



本時ではカースト制という歴史的・文化的背景を踏まえて経済発展への影響を考察させた。授業で用いたワークシートの中に、「カースト制の社会では、低カーストの人々は教育をきちんと受けられないため新しい職業に就けない」という内容の解答をした生徒が75%を占めた。したがって、時間軸と空間軸の双方に関連する課題を設定することで、生徒の思考力・判断力・表現力を育成することは可能である。ただし、それを可能にするには、最初の学習課題の設定が重要で、それに対しての熟考・工夫が必須である。

(イ) 仮説2の検証

本時では「思考・判断・表現」を評価する場面は1回とすることで適切に評価することができた。なぜなら、限られた時間の中で何度も「思考・判断・表現」を評価することは実質的に困難であるからである。したがって、評価規準・基準を作成する上においても、実際に評価することにおいても、1時間の授業の中で生徒の思考力・判断力・表現力を適切に評価するには、評価場面は1回又は多くても2回が望ましいと考える。

(ウ) 仮説3の検証

思考力・判断力・表現力を育成するための学習活動を適切に評価することで、生徒の思考力や思考過程を把握でき、指導と評価の一体化に結び付けることはできる。この結果を踏まえ、今後の教師側の授業改善に生かしていくことも可能である。なぜならば、今回の授業で用いた生徒のワークシートを見ると「低カーストの人たちの職業は世襲制が基本であるが、公務員に低カースト枠を設けても高カーストの人に奪われて効果が出ていない」という内容の記述が75%を占めるなど、生徒は諸資料から事象を読み取ることにはできるものの、それらに関連付けて傾向を捉えたり新たな事象を導いたりすることについては課題があるという現状が把握できたからである。

イ 成果と課題

(ア) 成果

成果の1点目は適切な評価規準と評価場面を設定することで「思考・判断・表現」を評価することは可能であり、その結果を踏まえて授業改善に結び付けられることが明らかになった点である。2点目は生徒の思考過程をイメージマップ等で可視化させることは、教師側だけでなく生徒にとっても自らの思考過程を整理することで、論理的に表現できるようになることが明確になった点である。3点目は本時のように動態地誌的方法では、学習内容を精選することが求められるが、本時では目標に即して精選したことで、学習内容が過多にならず思考する時間や記述する時間を確保できたことである。

(イ) 課題

課題の1点目は、カースト制をある特定の面からだけでなく、多面的に生徒自身が読み取り考察できるような資料の準備が必要であったことが挙げられる。2点目は思考力・判断力・表現力の育成に留意した授業を実施し、生徒一人一人の力を適切に評価するにはそれなりの労力が必要であり、その負担を軽減する方法を模索することである。イメージマップを作成させ、諸資料から読み取ったことを論述・発表させるという授業は今回で3回目であるが、生徒のワークシートの記述内容を見ると生徒の思考力等が着実に向上していることが分かる。思考力等を育成するには日頃からこのような言語活動を積極的に授業に取り入れていく必要がある。

## VI 研究の成果

生徒の思考力・判断力・表現力の育成については、4本の検証授業から昨年度に引き続き、地図や年表を活用するなどの時間軸と空間軸の二つの視点を重視した学習活動を工夫することを通して、地理歴史科の思考力・判断力・表現力を育成することができたと言える。

学習評価について、地理歴史科の多面的、多角的なものの見方や考え方に着目した思考・判断・表現の評価規準を作成し、最適な評価場面を設定して評価を行うこと、指導と評価の一体化により授業改善を図ることを、研究の中心に置いた。

特に、各学校の実態に合わせて単元全体の指導目標と育成すべき能力を明確にし、単元全体の評価規準を設定すること、単元の指導と評価の計画の中で思考力・判断力・表現力の育成に留意した学習活動やワークシートを工夫すること、それぞれの評価場面の評価規準を明らかにすることなどに力を注いだ。また、ワークシートの課題など、一つ一つの評価場面において綿密な評価規準を設定することについても検討を重ねた。

生徒がワークシートに書き込んだ内容については、3回にわたって検証したが、視野を広げて多面的・多角的に考えること、諸資料を根拠にして自分の考えを決めること、自分の考えを自分の言葉で適切に表現することなどが、回数を重ねるにつれてできるようになっていくことが確かめられた。

このことから、年間授業計画の中で単元ごとに指導目標を設定した上で、指導と評価の計画を立てること、学習活動や評価から生徒の能力や過程を把握すること、授業者が自らの指導を振り返り改善案を作成すること、という指導と評価の一体化のサイクルを継続することが思考力・判断力・表現力の育成に有効であることが明らかとなった。

## VII 今後の課題

今年度の実践では、単元の指導目標、評価規準、単元の指導と評価の計画を作成し、授業、評価、振り返りを行ったが、思考力・判断力・表現力を育成するために考察の時間を多く取るため、授業進度が遅くなるとの問題が挙げられた。また、適切な評価規準と評価場面の設定が難しく、手段が目的に陥る危険性が挙げられた。評価方法についても、判断することはできても表現ができないために、評価が低くなった生徒も出てきた。さらに、今回は指導と評価の一体化に結び付けるために、次の単元で授業改善をすることが十分ではなかった。

しかし、新しい学習指導要領に対応した授業の在り方として、思考力・判断力・表現力を育成するためには、これらの課題を乗り越え普及させていかなければならない。そうした中で、年間授業計画における目標（ゴール）を明確にするとともに、ゴールに即して学習内容を吟味し、配列する。その上で、評価の重点化・焦点化を図ること、そして指導と評価に活用するワークシートやペーパーテストを開発することが今後の検討課題と考えられる。

また、科目間の関連も課題である。学習指導要領には「世界史、日本史、地理それぞれの科目相互の関連を重視すること」とあり、今年度は、時間軸と空間軸の二つの視点を重視した学習活動や「江戸から東京へ」の学習活動を、科目間の関連性強化の手段として活用し、有効であることが検証授業から明らかになった。しかし、実践研究が不足しており、この点については、継続して研究する必要があると考えられる。



## 平成24年度 教育研究員名簿

### 高等学校 ・ 地理歴史

学 校 名	課 程	職 名	氏 名
都立農産高等学校	全日制	教 諭	内田 亜樹
都立浅草高等学校	定時制	主幹教諭	○石田 耕士
都立荒川工業高等学校	全日制	教 諭	丸山 優介
都立杉並総合高等学校	全日制	教 諭	○佐伯 英志
都立世田谷総合高等学校	全日制	教 諭	坂本 幸恵
都立大島高等学校	全日制	教 諭	吉岡 大輔
都立永山高等学校	全日制	教 諭	◎鳥羽 顕司
都立八王子拓真高等学校	定時制	教 諭	小島 一基

◎ 世話人 ○ 副世話人

〔担当〕 東京都教職員研修センター研修部教育経営課 統括指導主事 宮崎 宏明  
東京都教育庁指導部高等学校教育指導課 指 導 主 事 小林 正人  
東京都教育庁指導部高等学校教育指導課 課務担当係長 清水 和紀

平成24年度  
教育研究員研究報告書

高等学校・地理歴史

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成24年度第243号〕  
平成25年 3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課  
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号  
電話番号 (03) 5320-6882  
印刷会社 株式会社 イマイシ